

---

# 晴れた日に

蒼惟 宙

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

晴れた日に

### 【Nコード】

N2236D

### 【作者名】

蒼惟 宙

### 【あらすじ】

恋を知らない亜志貴<sup>あしたか</sup>と穩風<sup>おんし</sup>。心に傷を持つ亜志貴は、穩風と出会いやがて彼に心惹かれていく。そして穩風も……。2人の初恋の行方は……？

## ブローグ

「・・・すごい」

初めて幸時邸を見た僕の感想は、この一言に尽きた。

開かれている門の大きさだけでもかなりすごい。敷地内を見ると、白塗りの三階建ての建物は別れていて、その二軒を、二階にあるガラス張りの渡り廊下が繋いでいた。

所々苔が生えている石垣に囲まれたこの屋敷だけ、別世界だった。

（日本に、本当にこんな豪邸が存在したのか・・・）

僕は勇気を出して、門の木柱に取り付けられた少し場違いなインターホンを押した。すると、中から使用人らしき老人が出てきて、名前を告げると、笑顔で母屋まで案内してくれた。

広大な庭はきちんと手入れが行き届いていて、まさに日本の風景、といった感じた。

白い砂利が敷かれた道を渡ると、黒光りする瓦の屋根に漆喰の壁の立派な館が、堂々と朝日に照らし出されていた。

「ようこそおいでなさいました」

石畳の玄関に立って周りを眺めていると、黒地の着物を着た五十歳くらいの女性が出てきて、ふかふかしていそうな絨毯に正座をした。この人も使用人らしい。

彼女は、しばしお待ちをと言うと、側にあつた黒塗りの電話の受話器を手を取った。

（まだこんな電話あるんだ・・・）

「奥様、染谷そめやです。堂月様どうつきがお見えになりました」  
しばらく沈黙が流れた。

僕は、手紙以外で初めて『様』を付けられたことが、なんだか恥ずかしかった。

「すぐに奥様が来られます」

染谷さんという名前らしい使用人の女性は、いつの間にか電話を切

り、こちらを向いていた。僕は慌てて返事をした。

本当にすぐに、その人は来た。

その人、幸時凛<sup>こうじりん</sup>さんは、薄い藍色の瞳をしていてとても若かった。ほんのり赤い髪を高く結い上げ簪を挿している。紺色地の着物には、淡いピンク色の花吹雪が描かれていて、すらっと背の高い彼女によく似合っていた。

顔には、濃く化粧がされている。

「遙々幸時家にようこそ。さあ、お上がりになって」

とても澄んだ声だった。微笑んだ端正な顔は少し緊張しているように見えたが、優しそうな笑みだ。

案内されたのは、とても広い部屋だった。

幸時さんは食堂だと言った。

床は一面クリーム色のカーペットで、白色の壁には、肖像画や巨大な風景画が飾られている。天井からはシャンデリアが吊るされていて、僕は思わず「わぁ・・・」と声を上げた。

この部屋だけ外の和風なイメージとは違うなと思いながら部屋の中央を見ると、光沢のある茶色の長テーブルが置かれていて、同じ色の椅子が七脚ほど並べられていた。

そのうちの一つに、淡い紅色の着物を着た若い女性が座っていた。

幸時さんが彼女の方へと歩いていったので、僕もそれに従った。

綺麗な線の横顔、というのが、彼女の第一印象だった。

幸時さんと同じように髪を高く結い上げ簪を挿し、濃く化粧をしていた。

「堂月さんがお見えになりましたよ。ご挨拶なさい」

幸時さんが静かに呼びかけると、彼女の長い睫毛を持つ瞼がゆっくりと持ち上げられた。それからスツと立ち上がると、彼女はこちらを向いた。

化粧に関して、僕は何も知らない。

けれど、僕はただ彼女をキレイだと思った。切れ長の眼がとてもくつきりとしている。

しかし彼女の顔は、いつかどこかで会ったことのあるような気がする懐かしいものでもあった。

「これが、私の娘でございます」

そんな彼女の肩に手を添えるようにして、幸時さんが言った。彼女は軽く頭を下げた。僕も急いで頭を下げる。

（そうか、娘さんだったんだ・・・）

「あしたか亜志貴と申します」

彼女は少しハスキーな声でそれだけ言った。

「こんにちは。堂月です」

僕は緊張していたが、何とかちゃんと挨拶ができた。

しかし、言った瞬間に後悔した。こんな挨拶の仕方であつたのだろうか？と。

何かが足りないような、そんな気がした。

しかし彼女はじつと僕を見てから方向転換をし、部屋を出て行ってしまった。

僕は戸惑った。彼女の背中を見送りながら、空気が少し変わるのを微妙に感じ取った。

「失礼いたしました。亜志貴は人見知りをするもので・・・。染谷さん、堂月さんをお部屋にご案内してください」

幸時さんは本当に申し訳なさそうに言ってから、部屋の入り口に隠れるように待機していた染谷さんと呼んだ。

僕の部屋は屋敷の二階で、階段を上ったすぐ右手にあった。

長い廊下は木でできていて、ピカピカに磨かれている。

部屋は、多き白いベッドとベージュのクローゼットがあるだけのシンプルなものだった。

荷物を置いて少ししてから、僕は、この部屋に来る途中にあったステキな中庭をもう一度見に行こうと思った。

さっき上った少し暗い階段を下りて、来た道を逆戻りした。

しばらくすると、ガラス張りの、染谷さんが縁側だと言っていた場

所に来た。

三方を壁に囲まれたその庭は、玄関から続いているらしき白い砂利が敷き詰められていた。真ん中にはモミジの木が植わっていて、美しく紅葉している。

しばらくその景色を見てから何気なく左を見ると、縦横二十センチメートルくらいの青と水色のステンドグラスがはめ込まれたドアが見えた。

僕はなぜかその部屋が気になり、近づいた。

部屋の前に立つと、昔から知っているような香りがした。

（何の部屋だろう・・・）

「どうされました？」

背後から、よく通る声が聞こえてきた。僕は飛び上がった。

振り返ると。そこには濃い紫色の着物を着た、幸時さんと似たように背の高い女性が立っていた。色が白く、結い上げられた髪は艶やかな黒色をしている。

二重の眼は切れ長で、少し妖しげな印象を受けた。

「興味がありますか？」

注意されるのかとビクビクしていた僕は、微笑みながら囁くようにそう言った彼女をまじまじと見てしまった。

引き込まれてしまいそんな魅力を持つ、整った美しさだった。

「いや、その・・・中庭が素敵だったので、もう一度見に来たらこのドアが・・・」

僕が慌てて言い訳をすると、その人は僕の顔を見た。

決して睨んでいるわけではないのだろうけど、射るような、やや挑戦的なその視線に少し怯む。

「失礼いたしました。私はお嬢様のお世話をしております、かとうしろ加東白です、お見知りおきを」

僕は、踵を返した彼女の背中を見た。手足が長くて、身体の厚みが少し薄いような気がする。

「もうすぐ、その部屋に入れると思いますよ・・・」

彼女はそう言つて、フツツと謎めいた微笑を僕に向け、廊下の向こうへと消えていった。  
僕は、寒気を感じた。

## 第一話 友達に

朝早く起きるのには、もう慣れている。だって、五歳のときからの習慣だから。

時刻がちょうど五時三十分になると、私の身体は、勝手に起き上がる。

洗面所に行って顔を洗い、髪を結んで制服を着てから、食堂に朝食を摂りに行く。五時五十五分。スカートが皺にならないように、慎重に椅子に座る。

これが私の一日の始まり。

この食事が終われば、私は学校に行かなければならない。

学校は、私に苦痛を与える。その場所で、私は孤独だ。みんな私のことを避けている。

どうしてかは知っている。そっけなくて、イヤな感じだと思っているのだ。

（そんなつもりは無いのに、みんな……いや、気にしてはいけない）

否定をしてみても、孤独は私を容赦なく包む。

私の大嫌いな、オブラートみたいに。

「学校なんか、無くなってしまえばいいのに」

私が乱暴に小声で呟くと、眼を丸くした運転手の榛田<sup>はりた</sup>さんが、ミラ―越しに私を見た。

「何かおっしゃいましたか？」

私は「何も」と言った。

（もうすぐ冬休みだ。それまでは、頑張ろう）

学校では、授業中とテスト期間中が、唯一好きな時間。人と交流を持つ機会が無いから。

夕方五時ごろ、やっと狭く息苦しい箱から解き放たれ、私は帰宅する。



カラツと引き戸を開けると、玄関の絨毯の上で、染谷さんが正座をして待ち構えていた。これから着物に着替えて髪を結び直し、お化粧をしなければならぬ。

家の中での格好は、そうと決まっている。

「堂月さんは？」

自分の部屋で、私は何気なく加東さんに訊いた。ちょうど帯を締め終わった彼女は、私の前に立った。

「亜志貴様が帰られる少し前に、出かけられました。夕食までには帰るとおっしゃっていました」

私を椅子に座らせてお化粧道具を準備しながら、彼女はそう言った。堂月さんは、昨日からこの家に居候することになった人だ。

しばらく自宅から大学に通っていたけれど、少し遠いので、ここに住むことになったらしい。

私は昨日、緊張してしまつてまともに顔を見ることができなかった。で、どんな人なのかはつきりと覚えていない。

お母さんはそんな私を人見知りだと言うが、違う。分かっていない。私は他人が嫌いなのだ。

彼らは私を苦しみ、孤独にさせ、本当の私を見てくれない。

「ふん」

私は何も思わずにそう言った。しかし、それらしく聞こえたのか、加東さんはニヤッと笑った。

「残念でしたね。まあ、そうガツカリなさらなくても、すぐに会えますよ」

囁くように言つた彼女の声に、私はゾワゾワした。

彼女には、いつも謎めいた雰囲気漂っている。そして、よく意味深な笑みを浮かべる。

それに、これは本当に自分でもバカな考えだと思つただけで、時々私は、加東さんが男の人なんじゃないかと思つてしまう。

「そう意味じゃな」

「はい、口と眼を閉じて下さい」

彼女が人差し指を私の口に近づけた。私は仕方なく目を閉じる。  
彼女はこういう人だ。

机に向かっていると、ノックが聞こえた。

私は加東さんだと思い返事をした。

「どうぞ」

そして顔をそちらに向けた瞬間に、頭の中が真っ白になって、鼓動が早くなった。

「こんばんは。おー、けっこう広いね」

彼はそう言いながら、私の部屋を見渡した。

心臓の音が、外に聞こえてしまうのではないかと思った。

初めてちゃんと見た彼の肌の色は健康そうな色だ。黒い髪が少しふわっとなっていて、鼻筋が通っている。

全体的に整っていると、私は思った。

しかし、彼の優しそうな眼を見たとき、その透明な瞳の色に私は惹かれた。

少し青が混ざったような薄い墨色。白目がきれいなので、その青が強調されている。

「・・・どうしてここに」

私はこれだけを言うのが精一杯だった。

ちようど勉強机の本棚に顔を向けていた彼は、その眼で私を見た。  
そして微笑んだ。

温かくて、清潔感があった。

「ノックをしたら、君がどうぞって言ったからだよ」

気持ちを落ち着かせてくれるような彼の高くも低くもない声は、私を茶化しているわけではなさそうだ。

緊張の糸がするすると解けていくのを感じる。

「そうではなく、どうして私の部屋に来たのですか？」

私はこう言ったが、心の底で、彼に対してほんの少し開きかけた心を頑張って閉じようとしている自分と、それを阻止しようとしている

るもう一人の自分がいることに気がついた。

「あれ、知らなかった？僕、大学の都合でここに居候させてもらう代わりに、君の家庭教師をするんだ」

ここで暮らすのにそんな条件が付くなんて、予定外だ。

（私が関わることは一切無いと思っていたのに……。加東さんが言っていたのは、このことだったのかな）

私はとりあえず部屋の隅からいつも私がお化粧をする時に使う椅子を引きずって机の隣に置き、彼に勧めた。この椅子は、私のこの机にちょうどいい高さなのだ。座り心地は保証しないけれど。

「ありがとう。さて、と……。もう知つてると思うけど、堂月穩風ていつきあんしっていいます。よろしくね」

彼は布製の大きな筆箱らしい物を机に置くと、右足を組んでそう言った。

背の高い彼に、椅子は少し小さかった。

「よ、よろしくお願いします」

私は小さな声でそう言った。

「君のこと、なんて呼べばいいかな」

突然そう訊かれて、私は困ってしまった。

名前……。そんなもの、どうでも良いと思った。

「……。普通に……。」

なんと言っているのか分からなかった私の曖昧な答えに、彼はまた微笑んだ。そして、ちよつと待ってねと言って、彼は考え始めた。

横目でちらつと見たその姿は、背筋もまっすぐで、本当に整った人だと改めて思った。清らかな、と言った方が正しいのかもしれない。

「じゃあ、亜志貴さんに決定」

彼は満面の笑みを浮かべた。

「よし、始めよっか」

それから彼はそう言ったが、私は何も用意していなかった。慌てる私の横で、彼はまた何か考えているようだ。

「と言つても、実は僕も何にも準備してないんだよね。家庭教師の

話、今日聞いたばかりだったから」

きつとこれは、誰かの罠だ。と、思った。

お母さんか、お父さんかの・・・

「だから、今日はいろいろと亜志貴さんと話をしようと思うんだけど」

彼がちよつと苦笑する。

「・・・かまいませんけど」

そう言つて彼を見ると、彼の魔力を感じさせる瞳はキラキラ輝いて見えた。嬉しそうな表情をしている。

「よかった」

この人には、他の人とはまったく違う何かを、魅力を、感じる。自然と惹きつけられてしまう。

そんな風に思っている自分を知つて、私は少し驚いた。

しばらく話をしていると、ノックが聞こえた。私がどうぞと言うと、加東さんがティーカップをのせたトレーを運んできた。紅茶の良い匂いがする。

「ずいぶんと楽しそうにお話されていますね。外までお二人の弾んだ声が聞こえてきますよ」

加藤さんは丁寧にカップを置き、それから私の顔を見た。

「亜志貴様がこんなに楽しそうにしてらっしゃるの、久しぶりに拝見いたしました」

加東さんはそう言つて、ニコつと笑つた。

そういえば、こんなに楽しく誰かと話をするなんて、ずっと無かつたかもしれない。

「あ、加東さん・・・でしたっけ。昨日はどうも」

私は堂月さんのその発言に、目を丸くした。

(二人とも、いつの間に・・・)

「昨日の部屋が、まさか亜志貴さんのお部屋だとは思いませんでしたよ」

加東さんはそれを聞いてあの妖しげな笑みを浮かべ、独特な彼女の声でそつと言った。

「運命ですね」

私は堂月さんを見た。

彼は少し驚いたような顔をしていたが、

「そうですね」

すぐに微笑んだ。

加東さんは、もうすぐ夕食ですのと言って一礼すると、部屋を出た。

「加東さんって、面白い人だね」

彼の言葉に、私は一応「そうですね」と言った。

それからまた少し、話をした。

彼の隣は、安心できた。

「じゃ、そろそろ行こうか。明日からよろしくね。僕の担当は、国語だよ」

そう言つて、彼は立ち上がった。

（国語は、週に何回だったかな・・・）

そう考えてから、そんなことを考えた自分に、驚いた。

「僕たち、いい友達になれそうだね」

彼の言葉の中に、私は聞いたことのある単語を聞き取った。

そして次の瞬間には、自分の耳を疑った。

「・・・ともだちに？」

私は、彼がドアのところの手招きをしていることに気がつき、電気を消して、部屋を後にした。

縁側に差し掛かると、晴れ渡った空に、無数の星と半月が出ていた。月の明かりは、四角い中庭に植えられている色づいたモミジと私たちを照らした。

「わぁ・・・きれいだなぁ・・・」

彼は足を止め、中庭を方を向きたため息混じりに言った。私も立ち止

まった。

しかし私は、冷えた空気といつも見慣れているはずの景色に、彼をあわせ見ていた。

冴えた周りの世界に、彼だけがくつきりと存在しているようで、私の中に何とも言えない感じを刻んだ。

私は、静かに深呼吸した。

足袋越しに、気持ちの良い温度を感じた。

## 第二話 クリスマスイブ

今日は少し早めに授業が終わったので、学校前の雑貨店に寄ってから帰ることにした。

幸時家での生活が始まってからの数日間、幸時邸と駅の間を、僕は自転車で往復している。その間約二km半。

運転手の榛田さんという人が、お送りいたしますがと丁寧に申し出てくれたけど、丁重に断った。

僕はその日その日、一瞬一瞬で違う空気を味わうのが好きだし、景色を見ながらゆったりと自転車を漕ぐのが好きなのだ。

これは父と同じ意見で、父は、一日一日をとっても大切にする。

『今日はクリスマスの準備をいたしますので、お早めに』

染谷さんが、今朝玄関に座って靴紐を結んでいる時に突然声をかけてきて、僕は心臓が止まるかと思った。

『・・・クリスマスをするんですか？』

その質問は妥当だとも言うように、染谷さんは静かに頷いた。

彼女がクリスマスと言うと、何か別のもののような気がした。

『幸時家でも、毎年クリスマスをお祝いします』

僕は驚いた。この家は、外見や内装は洋風だけれど、ほとんどすべてが和で固められている。なので、クリスマスという行事が行われることに違和感を感じた。

しかし、特に追求することもないと思い、僕は染谷さんに返事をして、家を出た。

今日はバイトもないし、早く帰れる。

「ただいま帰りました」

僕は靴を脱いで自分の部屋へと向かった。部屋は、引っ越してきた当時と比べてかなり人の住む場所っぽくなってきた。

つい先日、勉強用の机と椅子を加東さんにもらった。『もったいな  
いから使って欲しい』のだそうだ。

僕はその椅子の上に鞆を置いてから、雑貨店のロゴが印刷された茶色の紙袋を開けて、淡い抹茶色の和紙で包装された小さな箱を取り出した。

これは、亜志貴さんへのプレゼントだ。いつも頑張っているから。今日の勉強の時間に渡す予定をしている。

「堂月さん、お帰りですか？」

ノックの音の後に、加東さんの声が聞こえてきた。僕はドアを開けた。

加東さんは、黒色の生地に白い小花が品良く描かれた着物を着て、それに合った帯を締めていた。

僕は彼女の後について長い廊下を歩いた。

この家の廊下は、ほとんど軋まない。僕の家とは大違いだ。

「今年は楽ですね」

唐突に加東さんがそう言ったので、僕は一瞬何のことなのか分からなかった。

「幸時家に仕えている男性は、あまり若い人がいないのです。でも、今年はあなたがいてくださるから、モミの木を運んだり、テーブルをセッとするのも、とても捗ります」

「あ、そうですか」

僕は納得した。

（でも、手伝いはどれくらいで終わるんだろう。夕方までかかることはないだろうけど・・・）

「心配なさらなくても、亜志貴様にはお会いできますよ」

加東さんが少し顔をこちらに向けて、フッと微笑んだ。

「ど、どうして・・・?!」

僕は、自分でも分かるくらい目を丸くした。

加東さんの、鼻の頭までかかっている影が、微妙に濃くなった。

「堂月さんは分かり易いんですね。顔のここに、ゴシック体で書いてありますよ」



そう言つて、彼女は人指し指で自分の頬を縦になぞつた。  
僕の右手が、思わず頬にいった。

・・・ごしつきたい？

「さ、準備をしましょうか」

気がつくと、そこは食堂だった。運転手の榛田さんや、初日に僕を案内してくれた年配の方を含めた何人かの男性と、染谷さんだと思われる女性がいて、いろいろと作業を進めていた。

僕は、加東さんのあの背中を見た。

加東さんつて、ちょっと怖いかも・・・

「堂月さん」

僕は肩を軽く叩かれたので、びっくりしてそちらを向いた。  
亜志貴さんが、不思議そうな顔で僕のことを見ている。

「どうしたんですか？さつきから何度も呼んでるのに」

その顔に、僕は少しどきつとした。  
慌てて彼女の手元を見ると、僕が指定した範囲を、とっくに終わらせているようだった。

僕はごめんごめんと言つて座りなおした。

「ちよつとボーつとしてた」

彼女からノートを受け取り、丸付けを始めた。

彼女の文字は独特で、僕はこの字が好きだ。

彼女がほんの少し微笑んでいる横顔が、視界に入った。

僕はいつからか、亜志貴さんといることが楽しくなっていた。週に四回あるこの授業がいつも待ち遠しい。

けれどいつも、彼女は微笑みはするが、それは本当の彼女じゃないと僕は思っている。

なんというか、いつでも身構えていて、悲しそうなのだ。

僕は、彼女が時々見せる影のかかった横顔に、何か切ないものを感じていた。

「さ、これで今日は終わろっか」

そうして立ち上がったとき、大切なことを思い出した。

「あ、これ、亜志貴さんに」

僕は足元に隠しておいたあの小さな箱を、彼女に渡した。

亜志貴さんはそれを受け取ったとき、少し困惑したような表情をした。困惑というよりは、驚きの表情なのかもしれない。

「・・・これは？」

彼女が僕を仰いだ。澄んだ藍色の瞳に、蛍光灯の輪が映る。

「プレゼントだよ。今日、クリスマスイブだから。」

僕は彼女の手を見て驚いた。少しだけれど、震えている。

彼女がもう一度箱を見る。

「戴いて・・・いいんですか？」

僕がもちろんと言うと、彼女はまだ、なんと言って良いのか分からないという顔のままで、とても大切なものでも扱つかのように慎重に動き、その箱を机に置いた。

僕には、それが嬉しかった。

「ありがとうございます。後で、開けてみます」

亜志貴さんはそう言って、やっと微笑んでくれた。そんな彼女を見て、僕は心から安心した。

部屋を出ると、闇に天使の羽が舞い落ちるように、雪が舞っていた。この、天使の羽、という表現は、堂月家でよく使う。

特に妹が。

光が当たっているわけでもないのに、羽たちは輝いているように見えて、僕はその幻想的な光景に、寒さも忘れてしばらく見惚れてしまった。

### 第三話 微妙な変化

今日は、何だかいつもの何倍も楽しくないような気がする。きつと、私は純白に弱いんだと思う。

堂月さんは、夜に降る雪が一番好きだと、一昨日のクリスマスイブに言っていた。

『天使の羽が一枚一枚舞い下りてきて、幸せを分けてくれているんじゃないかと思うと、言葉では言い表せないような気持ちになるんだ』

（堂月さんは、ロマンチストなんだな・・・）  
そんなことを思っ、私は、少し心が和んだ。

『後で開けてみます』

そう言ったのに、ついに今日まで開けられなかった堂月さんからのプレゼントが、机の引き出しに収まっている。

今日こそこの包みを開ける・・・そう、決めていた。

私は、新しいものを新しいものでなくするのは、とても惜しいことと考えている。

何だか、眩い光を放っているとても綺麗なものが、ごろごろと大量にそこら中に散らばってしまうような感じがするのだ。新鮮味が無くなるというのは、ある意味で私をガツカリさせる。

けれど、中身を見たい・・・。

その一心で、私は私の中にある理屈を捨てた。

一気に開け進めた箱の中のは、光と同じくらいの速さで私の心を攫っていつてしまった。

それは、所々に色硝子が散りばめられた、小さな小さな葉っぱを象った銀の曲線が美しいネックレスだった。

この『新しいもの』は、私にガツカリも、惜しいと思う気持ちさえ、微塵も与えなかった。

私は鏡の前に行き、着けてみた。とても軽くて、でも、着けている重みというか、着けていることを実感させてくれる。私を、安心させてくれる。

私がしばらく見ていると、加東さんがソックスをして入ってきた。

私は慌てて、着物の内側にソックスをソリとしまいこんだ。

「お茶の時間ですよ」

彼女は気が付かなかったようだ。私はほっと安堵の息を吐いた。

しかし部屋を去ろうとしている彼女の背中を見て、ふっと意識が薄れた。

「堂月さんのお部屋って、どこにあるんですか？」

そして、私は彼女を、無意識のうちに呼び止めてしまっていた。

加東さんが静かに止り、こちらにゆっくり振り向いた。

加東さん「少し（又はかなり）怖い

この法則が、頭の中にできた。特に、暗いところでゆっくり振り返られると、顔が無いんじゃないかと、いろいろと恐ろしいことを考えてしまう。

「西棟の二階、階段を上ったすぐ右横です」

しかし加東さんはいつものように妖しく微笑んだり、意味深に囁いたりすることはなかった。

私は少し驚いたが、お礼を言った。彼女は、何も言わなかった。

「はい、どうぞ」

当然のことなのに、ドアの向こうから彼の声が聞こえてくると、ドキッとした。

ときめきでないことは、無論。確かに緊張のせいだ。私はドアノブ手をかけた。

「あれ？どうしたの？」

彼の部屋にお邪魔して最初に目に入ったのは、机に向かっている彼の後ろ姿だった。頭だけを動かして私を見た堂月さんは、目を丸くしていた。

彼の眼と自分の目が重なって、緊張で死んでしまうのではないかと思っただ。

「あの・・・これ・・・」

私は、さっきしまったあのネックレスを慎重に取り出した。堂月さんはそれを見て、「あつ」と目を輝かせた。

「着けてくれたんだ。良かった」

彼は本当に嬉しそうに微笑んだ。

私は着物の上から腕を擦った。緊張するとついしてしまう、小さな頃からのクセだ。

「あ、あの、ありがとうございます。こんなに素敵なものをくださって」

身体後とこちらを向いた彼に、私はここに来る間中ずっと練習した言葉を言った。

その時、ふつと彼の表情が翳った気がした。私はそれを見逃さなかった。

「どういたしまして」

しかし、彼はすぐにいつもの優しい顔に戻った。私は不安な気持ちに、心を支配された。

（どうしてあんな顔をしたんだろう。私の言い方がいけなかったのかな。普通に言っただけだったけれど・・・）

私は部屋を後にしようと思ったが、彼に伝えようと思っていたことを思い出した。小さく空気を吸った。

「堂月さん、もう加東さんからお聞きになったと思いますが、お茶の時間です・・・よ」

私が振り返ると、彼は私のすぐ側にいた。私は思わず彼を仰ぎ見た。彼が爽やかに微笑む。

「今初めて聞きました」

彼の大きな手が、私の肩に乗った。私の心臓が、跳ね上がった。

（これも緊・・・張・・・なのだろうか？）

「さ、行きますか」

彼に促され、私の体は硬直したまま歩き出した。

しばらくして彼が手を放した後も、肩に彼の温みが残っていた。

私は彼が横を歩いていることに、どうしようもない、緊張とは違う心地を感じた。

彼の存在が、私の中で際立った。

## 第四話　ワーク

「いらっしやいませ」

夕陽がゆつくりとビルの上に沈み始めた、もうすぐ仕事が終わる午後五時頃、ベルの音がしたので、僕がそちらを見ると、若い女性が立っていた。ココア色のロングコートを羽織っている。

彼女は少しの間適当な場所を少しの間探していたが、やがて窓際にある二人用の席に腰を下ろした。僕は水入ったグラスをトレーにのせ、彼女の元に運んだ。

コートを脱いで長く細い足を組んでメニューを眺めるその姿は、モデルのようだと思った。ワインカラーの柔らかなハイネックのトレーナー、黒い膝上までのスカートに、黒いブーツを履いている。腰まである赤い髪が、夕陽に輝いている。

僕はふと、彼女が幸時さんに似ているような気がした。が、他人の空似ということもある。

「いらっしやいませ。ご注文はお決まりですか？」

僕が声をかけると、彼女は「ええ」と透明な声で言った。

（ん？この声は聞いたことがあるような・・・）

「コーヒーを」

不意に顔を上げた彼女の目が、一瞬にして見開かれた。僕はその表情の理由が分からなかった。

「あら、堂月さん・・・」

名前を呼ばれて、今度は僕が驚いた。

「どうして、僕の名前を？」

僕がそう言くと、彼女は目をずっと細めて微笑んだ。

「私ですよ。幸時凜です」

僕の頭の中のスイッチが切れたが、すぐに点いた。

「こ、幸時さん?!」

僕の素っ頓狂な声に、彼女はクスクスと楽しそうに笑った。

（やっぱり、幸時さんだっただ・・・）

服が見慣れていないからか、それとも髪を下ろしていたからか、容姿もまるで違った。化粧をしているかそうでないか分からないけれど、それでも彼女はキレイだった。幸時家での彼女とは、また違う華やかさがある。

「もうすぐお仕事は終わりますか？」

彼女が、放心している僕に問いかけた。僕は急いで我に返る。

「あ、はい」

そう答えると、彼女は最初から決めていたように、静かに言った。

「では、ご一緒願えますね。」

僕より3センチメートルほど背が低い幸時さんは、とても優雅に歩いた。

駅のホームに着いた。この時間だと、電車が来るまでそんなに待たなくてもいいだろう。僕と幸時さん以外に、人はいなかった。

「堂月さんは、大学の近くでバイトをなさってたんですね」

突然彼女が話しかけてきた。

「あ、はい。あそこは落ち着いていて、僕の好きな場所なんです。

初めてこの大学に来た時にあの店に寄ったんですが、気に入ってしまっ

僕はその日のことを思い出した。店の前の、レンガで舗装された道を挟んだ向こう側の桜並木に淡いピンク色の花たちが咲き誇っていた。穏やかな風が花びらを優しく包み込んで、運んでいった。その景色を見ながら、僕はあの店、『ワーク』でカフェオレを飲んだ。

「そうでしたか。私も幸時家に嫁いできた時、初めてこのお店を見つけて、とても幸せな気持ちになりました。それから、この町に用事がある時は、必ずあの店に行っています。もしかしたら、どこかでお会いしていたかもしれませんね」

そう言った凜さんの微笑みは、初めて見た時のものとは全く違った。店でも同じ表情をしたのを思い出した。



自然な表情は、とても柔らかかった。

「そろそろ亜志貴と仲良くなれましたか？」

彼女は、電車の中で流れていく景色を視界に入れながら、また質問をした。僕は、はいと答えた。すると、彼女は安心した様な顔を僕に向けた。

「堂月さん、もうお分かりだと思いますが、私は日本人ではありません」

そして突然、彼女は僕の目を見据えてそんなことを言った。

もちろん、分かっていた。初めて彼女を見た時から。彼女の顔は、明らかに欧州系の顔だ。肌の色も、瞳の色も全てが純粋に違う。

と、いうことは必然的に…

「あの子は、顔が少しみなさんと違います。私は、あの子が人に対していつも身構えていることが、不安なのです」

凜さんの目が、今度は窓の外を見つめた。僕は、何も言わずに同じ方向を見た。

いつもより電車が遅く走ってくれているような気がした。

「でも、彼女に直接聞くことができません。彼女は、感受性が強い子ですし、あまり人と交流を持つことを好みません。でも、堂月さん、聞いたところによると、あなたと話している時のあの子は、とても明るいそうですね。私は、それがとても嬉しかったのです。だから・・・」

もう一度こちらを向いた幸時さんの瞳が、しっかりと僕を捕らえた。

「彼女を、支えてあげてください」

（ああ、この人も母親なんだな・・・）

とても母親には見えない彼女を、僕は改めて認識した。

「もちろんです。」

僕が言うと、幸時さんの笑顔が、まるで精密でとても丁寧に描かれた一枚の絵画の様に、僕の心と目を奪った。

いつか、亜志貴さんもこんな風に笑ってくれる日がくるだろうか、と流れる景色の中で思った。

「ただいま戻りました」

僕と幸時さんが帰ると、ちょうど料理長さんが通りかかった。彼は染谷さんと同級生だと亜志貴さんから聞いていたので知っていた。とても恰幅の良い、優しくて明るい人だ。

「あれ、奥さん、堂月さんと一緒に一緒ですか？」

彼は僕たちの前を行き過ぎたので、少しバックして僕たちに挨拶した。僕も頭を下げる。

「ええ、出先でお会いしたんですよ」

幸時さんが先に靴を脱いで、軽やかに玄関に上がった。

「ということは、お嬢さん以外は、みんな奥さんの私服姿を見たっ  
てことですね。」

彼は、白髪混じりの髪をクシャクシャとしながら言った。

お嬢さんって・・・

「亜志貴さんは、あなたの本当の姿を知らないんですか?!」

僕は思わず叫んでしまった。しかし、彼女は少し照れたように「ええ」と微笑んだ。

「亜志貴に、あまり見て欲しくなかったのです。私は、この家に受け入れられざる者でした。外国人が日本の文化を、この幸時家の伝統を受け入れられるのかと、亡くなった義父は私と主人の結婚に反対していました。しかし、義母と彼のお友達は、私に色々と教えてくださる優しい方でした。もちろん、義父も考え方を改めてくださり、私に親切にしてくださいました。そしてここに嫁いできてから、私はほとんどをあの格好で過ごしてきたんです」

彼女は玄関の壁に掛けられた二つの肖像画を、愛おしそうに見上げた。それから僕を見ると、ふっと微笑んだ。

「もうすぐ亜志貴が帰ってきますので、私はお先に失礼致します。

堂月さん、今日はゆっくりお話しできて良かったです」

彼女はそう言って、流れるようにその場を立ち去った。

僕は、帰ってきた亜志貴さんに名前を呼ばれるまでその場に立ち尽

く  
し  
て  
い  
た。

## 第五話 鬱々と

雨が降っている。

年の瀬はいろいろと思い出す。冬休みで授業が無いからだろうか、それとも、もうすぐ一年が終わるからだろうか。

今年は、お父さんの会社が創立百周年記念だったのでその式典があった。

でも、それ以外は例年通り。お父さんとお母さんについてパーティーに行ったり、学校の行事があつたり。

毎年毎年同じようなことの繰り返し。

物心ついた時から、友だちと遊んだ記憶なんて無い。

でも、中学生三年生の時、私にも一人友達ができた。

はがさわこ  
芳賀佐和子。

それが彼女の名前。私の友達だった人。私を、裏切った人。

佐和子とは、中学三年生になって、初めて同じクラスになった。絵が上手で、明るくて、男の子とよく見間違われる子だった。

彼女が初めて話しかけてきたのは、始業式の翌日の昼休み、私が本を読んでいる時だった。

「それ、何ていう本？」

私が顔を上げると、満面の笑みで彼女がそこに立っていた。私が本の名前を答えると、彼女は「知ってる！」と言って手をたいた。

「今映画になってるよね。私も図書館で借りて読んだことがあるんだけど、感動しちゃった」

それから、私たちは休み時間や移動教室、体育の時間も、お弁当の時間も、大抵一緒にいるようになった。彼女が話すことは、何もかも私にとって初めてのことだった。学校が終わると、途中まで一緒だったので電車の中でもたくさん話をした。

彼女という時が、私は一番楽しかった。

しかし、一学期の後半、私は一週間ほど学校を休んだ。お父さんの仕事の都合で、海外に行かなければならなかったのだ。

その後夏休みも終わって久しぶりに登校すると、彼女は他の子と何か話をして笑っていた。

私は近くを通った時に「おはよう。」と言った。

彼女も「おはよう」と、一ヶ月と一週間前までのように明るく返事をしてくれた……はずだった。

「……おはよ」

彼女の態度はまるで違った。怒っている様な声だった。彼女の笑顔が曇った。

その日一日、佐和子は私に冷たかった。私がまるで酷い事でもしたかのように、一言も口をきいてくれなかった。私は、それが何故なのか全く見当もつかなかった。久しぶりの授業も、ほとんど頭に入らなかった。

放課後、下校途中に忘れ物をしたことに気がつき、教室に引き返した。

オレンジと黄色の夕陽が差し込む教室には、まだ誰かが残っているようだった。

中から、佐和子と、同じクラスの女子の声が聞こえた。

「でもさー、よく今まで耐えたよね」

同じクラスの女子が言った。彼女たちは、私がいることに全く気がついていないようだった。

（何のことだろう？佐和子、やっぱり何か悩みでもあったのかな）私は思わず半分開いている扉の前で息を潜めた。

しかし、その次の佐和子の発言に私は愕然とした。

「ほんとだよ。大体さあ、亜志貴って暗いんだよね。一緒に話しても全然テンション上がんないし」

「……え？」

「そうそう。それにあの子、自分がちょっとキレイだからって、調子乗んなって感じ。なんか、すましてる感じでさ」

「だよねー。ちょっと取っ付き難いし、感じ悪いような気がしてたんだ」

「私さ、思ってたんだけど、絶対佐和子も見下されてたよ。あの子、自分が頭良いことを密かにみんなに見せつけてたしさ」

「マジで？それ最悪。まあ一学期の最初だったし、友達ができるまで付き合っただけでも良いかなって思ったけど、やっぱりダメ。なんであんな子にしたんだろ・・・」

息をすることを忘れてしまった。震えるのを抑えることができなくて、今にも崩れそうだった。どうして自分がここにいるのかさえも分からなくなってしまった。どうしてこんなことになってしまったのかも、全く分からなかった。

どうして？ばかりが頭に浮かんだ。

「ってかさ、亜志貴って変な名前だよね」

「マンガかよ！」

二人はゲラゲラ笑った。

ドサッ。

「?!」

彼女たちが同時に扉の方を向いた。私を見た佐和子が、固まった。

私の中で、すべてがなくなっていくた。

どうして・・・どうして・・・どうして！

目頭が熱くなった。でも、泣きたくなかった。そんな顔を、見せたくないかった。

「さようなら、芳賀さん」

私は、足元に落ちていた体操服の入ったナップサックを拾って、逃げるように走った。暗くなりかけた廊下を、全力疾走した。そのまゝ家まで、ずっと走り続けた。

（私は佐和子の何だったの？友達ができるまでの埋め合わせ？私がいつあなたたちを見下したの？見た目だけで、感じとかそんなことだけで決め付けないでよ！）

心の中に、次から次へと、佐和子たちにぶつけた言葉が湧いてき

た。佐和子を心配した自分を罵倒した。涙が伝っている部分だけが、冷たい風を避けた。

家に帰り着いたとき、染谷さんや料理長の桃井さん<sup>ももい</sup>、加東さん、そしてお母さんが一斉に私を出迎えた。榛田さんが、私がなかなか駅から出てこないの、心配して学校に電話をしたけれど、もうとつくに帰ったと言われ大騒ぎになっていたらしい。

私はお母さんにそのことを聞かされるまで、榛田さんが毎日駅まで送り迎えしてくれていることなんてすっかり忘れていた。それに、学校から一時間近くも走っていたことも、今の私にはどうでも良かった。

もう、何もかもが嫌になった。

頭の中でたくさんのがれが渦巻いた。

ご飯を食べたくないと言うと、当然、お母さんや染谷さんは理由を聞いたが、私は何も答えず、お風呂場に直行した。そして部屋に戻り、ベッドに倒れこんだ。

『大体さあ、亜志貴って暗いんだよね。一緒に話しても全然テンション上がらないし』『ちょっと取っ付き難いような感じがしてたんだ』『まあ一学期の最初だったし、友達ができるまで付き合ってたあげても良いかなって』『なんであんな子にしたんだろ・・・』

真っ暗な部屋の中に、佐和子の台詞が、白い文字となって浮き上がっては消え、浮き上がってはまた消えた。

私は、初めて佐和子と友達になった時からをずっと振り返ってみたけれど、理由らしきものは何一つ見つからなかった。

（芳賀 佐和子は、結局みんなと同じだったんだ。私のことを、そんな風に思ってたんだ。でも・・・もしかしたら私が何か佐和子に気に障るようなことを言ったり、したりしたのかもしれない・・・）私は、ずっとそんなことを考えていた。お兄ちゃんに相談したかったけれど、その時彼は高校の学生寮で暮らしていた。お兄ちゃんに会いたかった。

結局答えは見つからず、いつの間にか眠りに就いていた。夢も見ず

に眠った。

溢れてきた涙が、ベッドのシーツを濡らした。

その日から、私たちは一言も言葉を交わすことなく、卒業を迎えた。運良く高校が違った。

私は、もう誰のことも信じたくなくなった。信じた分だけ、きっとまた傷つく。そんなのは嫌だ。学校は、周りの人たちは私を潰す。お父さんもお母さんも忙しいから、私のことを考える余裕は無い。私は、誰のことも受止められない。

でも堂月さんは・・・違う気がする。

私は少しずつ彼を受け入れている。彼に会うのが、堂月さんと話をするのが何より楽しかった。

そんなことを考えていると、ノックが聞こえた。私は返事をした。彼はドアを開けて、いつもの笑顔で挨拶をしてくれた。

私の鬱な気分は、吹き飛んだ。



## 第六話 招かれて

いつものように、食堂で幸時さんと亜志貴さんと一緒に夕食を摂っている、ゆつくりとドアが開いた。

そこには、英国の紳士のような、今にもバラの香りがしそうな背の高い四十代前半くらいの男性が立っていた。僕と同じくらいの背だ。

「あら、お帰りなさい賢貴さん<sup>まひき</sup>」

ちようどちぎったパンを口に入れようとしていた幸時さんが、立ち上がって彼の方に向かった。

この人が幸時賢貴さんか。

いつか亜志貴さんが言っていた。彼は、海外に幾つも支店を持つ、大会社の社長らしい。

シチューを運んできた染谷さんも、慌てて彼に駆け寄った。しかし、亜志貴さんはただ彼を見ているだけだった。

「お電話してくだされば、榛田に伝えてお迎えも致しましたものを・  
・・」

染谷さんは彼が脱いだコートを受け取った。彼の体つきは、細くもなく太くもなく、そのスツキリした白い顔も笑顔も、とても中年の男性だとは思えなかった。

「いや、ちよつとみんなを驚かせてやろうと思ってね」

そう言ってから、彼は亜志貴さんのところにゆつくりと近寄った。

彼女はスツと立ち上がった。特に表情を変えず、自分の父親を見ている。

「お帰りなさい」

そんな彼女を見る彼の眼差しと表情は、とても暖かかった。

整えられた黒髪と、薄い赤銅色の透き通った瞳がよく似合っている。

「ただいま、亜志貴。久しぶりだな」

「そうですね」

会話は、それだけだった。

彼女がちらつと僕の方を見た。すると、彼もこちらを向いた。

「ん？そこに座っているのは、もしかして穩風君かな」

彼は僕の方に歩んでくると、片手を差し出した。僕は急いで立ち上がり、その大きな手を握った。

「こんばんは、幸時さん」

僕は改めて挨拶をすると、彼は亜志貴さんを見た時と同じ笑顔で、こんばんはと言った。

夕食が終わって部屋で勉強をしていると、内線が鳴った。この家は広いので、ほとんど連絡はこの内線で行われている。

もしもし

加東さんだった。

旦那様が、堂月さんとお話しをなさりたいそうです

彼女は、幸時さんの部屋の場所を言って電話を切った。ここに来て三週間以上経つので、屋敷の中はだいたい覚えた。

彼の部屋のドアには光沢あって、金のプレートに『Private Room』と筆記体で書かれている。ノックをすると、低く落ち着いた声が返事をした。

「お、来てくれたね」

彼は部屋の中央にあるモカ色のソファでくつろいでいた。

幸時さんの部屋はブラウンをベースにした部屋で、電気もあまり明るくないので、とてもリラックスできた。

僕は、向かいのソファに座るように言われた。とてもフカフカで、気持ち良かった。彼が、僕の顔を見て、微笑んだ。

「このソファ、とても気持ちが良いだろう？」

僕はハッとして、少し恥かしくなった。

「す、すいません」

そう言うと、彼は笑った。

「加東さんの言う通りだ。君の顔に、君の気持ちがゴシック体で書

いてあつたよ」

その瞬間に、加東さんのあの妖しげな微笑みが頭に浮かんだ。

（加東さん・・・何ということ・・・）

「君には、亜志貴がお世話になってるようだね。出張していたもので、挨拶が遅れて申し訳ない」

彼が頭を下げた。僕は慌てた。

「と、とんでもないです。こちらこそお世話になってます」

彼は穏やかに目を細めた。とても素敵な人だと思った。

「大学では、何を勉強しているのかな」

彼は木造の、脚の短いテーブルに乗っているポットに手を伸ばし、

僕の前にあるティーカップに紅茶を注ぎながら言った。

「商学を、あと、英語を少し」

僕の答えに、彼は目を輝かせた。

「そうか。それは素晴らしい」

僕たちはゆつたりと紅茶を飲んだ。静かだった。

「君は、亜志貴をどう思っているのかな」

「?!」

僕は紅茶を吹き出しそうになって、咽た。

（今、何とおっしゃったんですか賢貴さん?! なんだかとても面白い質問をされたような気がするんですけれど）

「ハハハ、穩風君は相変わらずとても素直だね」

彼は無邪気な子供みたいに目をキラキラさせて、楽しそうに笑った。

（相変わらず・・・?）

「亜志貴は、あまり笑わない子だ」

彼は少しして真剣な面持ちになり、こう切り出した。

「凜の時も、そうだった」

彼の眼は、昔を思い出すように、遠くを見ていた。

あの時の、電車の中での幸時さんと同じように。

「私達が結婚を決めた頃、外国というものはまだ珍しかった。国際化も、一部でしか行われていなかった。私の父は特に典型的でね、

とても反対したよ。式典や行事に行っても、周りの目は冷たかった。でも、母と親友は、凜のことを受け入れて、とても親切にしてくれた。そういう人が少しでもいることが、彼女にとって大切だったんだ」

彼はそこで息をついた。

「時代が変わったと言っても、人の思考までは簡単にそれに対応しない。未だ偏見を持つ人もいるだろう。見た目が違うというだけで避ける人も中にはいるんだ。私は彼女ではないから、彼女の気持ちを完全に理解することはできない。でも、見守ってあげたいんだよ」彼の表情が僕の父親に似ていたような気がして、心が温かくなった。「亜志貴は、とても優しい子だ。傷つくと、きっとその傷の治りは遅い。彼女のことを、よろしく頼む」

彼が再び頭を下げた。僕は、あの時と同じように、今度ははっきりと返事をした。

「もちろんです」

彼の部屋を出る時、戸口で彼は僕に、僕の父親のことを訊ねた。僕がよく分からずに「元気です」と答えると、彼はとても嬉しそうに「そうか」と言った。

## 第七話 上弦の月明かり

「では、今日はここまでにしましょう」

細い眼鏡をかけた理科の先生は、そう言ってテキストを閉じた。私はその言葉を待っていた。

次は国語だ！自然と笑顔になる。

「・・・そんなに理科の授業が嫌でしたか」

理科の先生に言われて、私はブンブン首を横に振った。

「あ、ありがとうございます」

私がいつものように挨拶をすると、ショートカットが良く似合う彼女は微笑んだ。

「亜志貴さん、最近可愛さに磨きがかかった様に見えます」

私は、先生のその突然の発言の内容が信じられなかった。

「そ、そう・・・ですか？」

戸惑った私を見て、彼女は、加東さんの様な意味深な笑みを浮かべた。

彼女は頭のキレる美人なお姉さんという感じだけれど、こういうところは加東さんに似ている。

「女の子とは、そういうものです」

彼女が出ていった後も、私はその意味を考えていた。

（どうということだろう）

「こんにちは」

「うわっ！！」

私は急に隣で声が出たので、文字通り飛び上がってしまった。

「ど、ど、堂月さん・・・」

驚いた私の顔が可笑しかったのか、彼は笑った。顔が火照ってしまった。

「の、ノックが聞こえませんでしたよ」

私は少しムツとして、彼に言った。

そのとたん、いつも吸い込まれそうになる彼の目が、ふっと細くなつた。私は、彼のその表情にドキツとした。

(・・・何？今の・・・)

「返事をしたことも忘れてしまうほど、何か考えていたの？」

(え、返事したかな？)

私は、あれ？と記憶を辿つた。

「いえ・・・その、理科の先生がおっしゃったことについて考えていたんですけど、よく分からなくて・・・」

彼は「そっか。」と微笑んだだけで、特に追求しなかった。

私も、訊かれたくなかったので、彼のその行動に感謝した。

私が最後の問五を解き終わり、さりげなく横を見ると、彼は頼杖をついて、彼の前にある窓の外に目を向けていた。

今日は快晴だから、月が出ている。ここは住宅街から少し離れているので、街灯が無い。

月明かりが彼を照らしている。全てに、光が映っている。

私は堂月さんを、最近まともに見る事ができなくなってきた。理由は分からない。だけど、彼に会うことが出来るのが、とても嬉しいのだ。

未知の心境というのは不可思議で理解できなくて、不安になる。

「亜志貴さんは、どの月が好き？」

私は突然の質問に、思わず「え」と言ってしまった。彼の授業は、いつもこんな感じで、彼のリズムで進んでいく。それでも、きつちり進んでいるのだから、すごい。

「どの月って・・・？」

彼がこちらを向いた。

「月の形。満月とか、半月とか、いろいろあるでしょ？その中で、亜志貴さんはどの月が好き？」

私は考えた。

「私は・・・」

こんな些細なことにさえ、私は緊張してしまう。答えなきゃ。

「上弦の月・・・」

私は、上弦の月が好きです。

この言葉は、最近知った。けれど、形としてはこの形が、昔から好き。

「偶然だね。僕も、上弦の月が好きなんだ」

彼のその言葉は、私を幸せにした。堂月さんと少しでも共有できるものがあることが、私は素直に、心の底から嬉しかった。

「月はさ、それ自体が変形するんじゃないかって、影で見えない部分ができるでしょ？その見えない部分までを想像で描き出すのって、人の心の見えない部分を探すのに似ているなって、時々思うんだ」

「え？」

「だから、その主人公はきっと、月を使うことで、相手の気持ちは表現し難いし、自分の考えも言いたくないって言ってるんじゃないかな」

彼の顔が、また優しくなった。

私は初め、何のことかさっぱり分からなかったけれど、すぐにそれが今解いた問五の答えのヒントであることに気がついた。

（そうか、なるほど。こんな風にさり気なく授業を進めているのか。堂月さんは、教え上手だな）

「でも、この答えもとっても良いと思う。亜志貴さんは想像力豊かなんだね」

彼は、裏の無い笑みを私に向けてくれた。超能力なんか無くても、分かる。彼の笑みは、いつもそうだ。

そう思った瞬間に、私の心はある条件に確定された。同時に、佐和子の言葉が脳裏を過ぎった。

『あ、亜志貴・・・本当に知らないの?!』

『うん。それがどういう事なのかも、私にはいまいちよく分からない』

『んー・・・じゃあ、教えてあげる。そういう感情は、考えてでき

るものじゃないの。突然なるんだ、そういう気持ちに。その人が側にいるだけで、ドキドキする。それが、人を『好きになる』ってことなんだよ。』

人を『好きになる』・・・なんて、私の理解範囲を超えていた。

そんなこと、小説上の、話を盛り上げるためのものだと思っていた。でも、今のこの想いが、きっとそうなんだろう。

『女の子とは、そういうものです』

（理科の先生は、この事を言いたかったのだろうか・・・）

「どうしたの、顔が赤いよ？」

彼が私の額に手を伸ばしてきたので、私は思わず、「なっ何でもないです！」と言った。彼は少し驚いた顔をしたけれど、すぐに元に戻って、丸付けを始めた。

上弦の月は、いつまでも彼を照らしている。



## 第八話 突然の来客

夕方が近づいてきた午後、家に帰りつくと、トルコブルー色の少し底の厚い靴が、黒い大理石に置かれていた。それは、見知らぬ靴だった。

「ただいま帰りました」と言った僕の声を聞きつけ、どこからか、染谷さんがシユタタと早足で玄関に参上した。

「お帰りなさいませ、堂月様。お客様がリビングでお待ちです」  
「え、僕ですか？」

染谷さんは深く頷くと、またどこかへ、早足で去ってしまった。  
忙しい人だ。僕は、彼女を見る度そう思う。

リビングは、僕の部屋がある西棟の一階、玄関を背中左に曲がり、真っ直ぐ行つた突き当たりにある。この家で、食堂と並ぶ大きな部屋だ。そこには、幾つかベージュのソファがあり、僕はまだ一度しか行つたことがなかった。

リビングの引き戸を開けると、そこには幸時さんと、もう一人、僕より五cmほど背が低い細身の人が座っていた。その人は、僕がよく知る人だった。

彼女たちは向かい合つて楽しそうに笑っていたが、入ってきた僕を見たその人は、嬉しそうに顔を輝かせ、勢い良く立ち上がってスリッパをばたばた鳴らしながら駆け寄ってきた。

「穏風っ！」

その人はその勢いのまま、僕に抱きついてきた。体は軽いけれど、僕は少しよろけた。

「まあまあ、本当に仲が良いこと」

幸時さんがソファに座つたまま言つて、フフフと笑つた。

僕は倒れそうになるところを踏ん張り、何とか無事だった。

「穏風、会いたかったぞッ！」

その人はニイっと、満面の笑みを浮かべた。

「紳、どうしたの突然？」

僕の驚く顔を、紳は面白がった。紳がどうしてここを、僕が幸時家にいることを知っているのか分からなかった。紳はフランスに留学しているはずなのだ。

「留学はこの間終わったのだ。それで、日本に帰ってきたのだけど、父さんと母さんは二人で温泉旅行に行くって言っし。やっと長い旅を終えて帰ってきたボクを置いて旅行に行くなんて、信じられない！」

紳は一気に喋り終えると、ゴクゴクとコーヒーを飲んだ。

「元氣そうだね、紳。それで、どうして僕がここにいて分かったの？」

僕がそう言っていると、紳はまた堰を切ったように喋り始めた。

「そお！帰ったら穏風がいなくて、すっごく寂しかったです。で、母さん達に聞いたしたら、ここに居候してるって白状したのだ！」

「別に聞いたさなくても、普通に聞けば良かったんじゃない？」

「それで、もう大慌てで飛んできたってわけなんだな。大変だったんだぞ、ここまで来るの。まったく、あちこち移動するなよなっ」

紳はプーと頬を膨らませた。これは、昔からの紳の癖だ。

「いや、ここ以外に僕どこにも行ってないんだけど」

しかし、紳は聞いていなかった。

僕がやれやれとため息をついたとたん、幸時さんが吹き出した。僕は彼女がこんなふうに笑うのを初めて見たので、ビックリした。

「ど、どうしたんですか？」

僕が訊くと、彼女は深呼吸をして、僕の問いに答えた。

「あなたたちの会話が面白くて」

すると、紳の顔がパー・・・っと、ますます明るくなった。

紳は、自分のした事で人が笑ってくれるのをとても喜ぶ人間なのだ。

「いつもこんな風なの？」

「そうなんです。もう穏風ったらいつもこんな感じで・・・。あ、

幸時さんに一つお願いがあるんですけど」

紳がそう言った瞬間、嫌な予感がした。

「もうすぐお正月ですよ。だから、ボクも少しの間ここに居候させていただけませんか？」

・・・嫌な予感的中。

幸時さんは爽やかに微笑んで、

「もちろん。人数は多い方が楽しいに決まっていますもの」と言った。

（勘弁してくれ・・・）

「穏風、この家はとても広いのだな！どうなっているのだ？」

紳は、染谷さんに部屋を案内されてから数分も経たない内に僕の部屋に遊びに来た。紳はとても方向感覚と記憶力が良いのだ。一度行った場所や見たりした事は忘れないし、新しい所に行っても、まず迷うことはない。

『なんとなく歩いてたら、ここに来たのだ』

・・・なんとなくで数分も経たない内に人間は初めての場所を移動できるのだろうか。

きつと勘を頼りに、屋敷の廊下を全力疾走したに違いない。

「ここは西棟って言ってね、三階建てなんだけど二階にガラス戸張りの渡り廊下と、一回に縁側のある渡り廊下があるんだ。そこを渡ると東棟に行けるんだよ。東棟には幸時家の人の個室と、一階の奥に食堂があるんだ」

「ふん」

こんな風に、新しいことを聴く時の紳はとても大人しい。まるで、すべての情報を吸収しようとするかの様に、じつと相手の目を見つめて、静かにしている。

「西棟には主にお手伝いさんや、僕たちみたいな人が寝る部屋と、さっきのリビングがある。西棟と東棟は左右対称になってるんだ」  
きつと紳は、この屋敷内の全ての部屋の場所を、半日もあれば覚え

てしまうだろう。

その他にも、僕は紳に、この家の女性がなぜ化粧をして着物を着ているのか等を、説明した。この話も、亜志貴さんから聞いた。紳はしばらく、ふむふむと聴いていた。

「この家に子供はいないのか？凛さん若いけど」

僕の説明が終わると、紳はそう言った。彼女は親しい人は下の名前で呼ぶ。幸時さんと紳がいつそんなにも親しくなったのかは定かではないか……

「亜志貴っていう子がいるよ。とても賢くて、背は……紳と同じくらいかな」

僕の顔を見ていた紳が、ニツと悪戯っぽく笑った。

（しまった……）

「その子、女の子？」

僕はまた嫌な予感がした。紳は女の子に目が無いのだ。

「え、うんまあ……」

僕は仕方なく認めた。

「じゃーさー……」

「亜志貴さんに手を出しちゃ駄目だよ。それから、彼女の後をつけるのも、ご飯のときにやたら彼女に話しかけるのも、夜中にこっそり部屋の前に自作の『愛のソングメドレー』を置いておくのも無しだからね！」

僕は息もつかずに言った。紳は、さっきと同じように頬を膨らませた。

「ちえっ、どうしてボクがしようとしたこと分かるの？」

「僕たち何年一緒にいると思ってるの？それくらいお見通しだよ」紳が座っている椅子に、僕は近寄った。紳は、まだフランスの香りがする。

僕は、黒いウルフカットの髪をクシャットとしてやってから、頭を撫でてやった。こうすると、紳は喜ぶ。

こうして紳という時間は本当に久しぶりで、懐かしくて、僕はとて

も癒された。

夕食の時、紳は僕との約束を守って『やたら亜志貴さんに話しかける』ことはしなかった。しかし、予想通り、紳は亜志貴さんに一目惚れした模様。

食後、リビングで幸時家の三人、そして僕の合計四人は、紳のフランス留学の話をきいて時を過ごした。誰とでもすぐに友達になれる紳の能力が、遺憾無く発揮された。

今年は一年ぶりに紳と一緒に年越しを迎えることになった。

流石に、今ごろどこかでゆったり温泉に入ってくつろいでいる誰かさんたちに、毎年旅行に行くのをやめて欲しい・・・と電話することはできなかった。

## 第九話 紳

大晦日前日。

私は今日までに冬休みの宿題を、全て終わらせてしまった。暇で暇で仕方が無かったのだ。

しかし、今日からは退屈ではない。紳さんが、勉強が終わった時間を見計らって遊びに来てくれるのだ。

紳さんは、昨日突然やって来て、そして居候することになった人だ。昨晚の食事の時、彼女は立ち上がり、可愛い笑顔で自己紹介した。けれど、この人がどういう人なのかちゃんと分からない。

でも、堂月さんと関係があることは確かだ。二人は、とても仲がよい。

私は、そんな彼らを見ている時、少し心が痛くなる。

「やつほー。今日は土産付きなのだ」

ちょうど数学の先生と入れ替わりに紳さんが入ってきた。手には、ワインカラーの物体がさがっていた。それは、駅の近くにあるケーキ店の紙袋だった。

「このクッキー、とっても美味しいです！」

紳さんは、チョコクッキーの味に感激したようだ。私は、どんな事にも素直に感動を表現する紳さんを尊敬した。

「あの店はケーキも美味しいけど、このクッキーが一番人気なんですよ」

私が説明すると、紳さんはうんうんと頷いた。

「これは運命の出会いなのだっつ」

そう言ってから、紳さんはゴクゴクとミルクを飲んだが、ふと思いついたように私を見た。

「ねえ、亜志貴って呼んでも良い？あと、敬語は止めるのだ。ボクのこと、紳で良いのだ」

ズキンとした。下の名前で友達みたいに呼ばれるのは、佐和子以来だ。私は急に不安になった。

でも……

「そうね、敬語はなし。亜志貴で良いよ、紳」  
きつと、今度は大丈夫かもしれない。

ミルクを飲んでいた紳は、ホントに？！と言って、嬉しそうに笑った。

紳の顔は、吸い込まれそうになる。

二重の目はキレイな線で描かれた絵みたいで、輪郭も整っている。とても肌が透き通っていて、眉の形が少し堂月さんに似ているような気がした。

総合的な雰囲気としては人間というよりも、軽やかな感じのするシヤム猫のようだ。どこか異世界の香りがする。小説で読んだ、私の憧れる異世界の香りが。

「亜志貴って、すごく良い名前だね」

紳にそう言われて、私は驚いた。今まで、そんな風に言われたことが無かった。

むしろ、変な名前だと笑われてきた。

「そうかな」

私の顔を見た紳が、まるで私の気持ちを読み取ったようなことを言った。

「他人の名前を笑う人は、自分の名前の価値も分らない人なのだ」  
紳の言葉は、私に優しくかった。心の中が、晴れ渡った。

「紳って、どんな意味なの？」

私が聞くと、紳は何かを一生懸命思い出そうとした。

「んー……母さんから聞いたんだけど、たしか、教養のある立派なって意味。でもそれは漢字の意味で、素直な自分をしっかりと持った、心の優しい人になって欲しいからってつけたらしいのだ。まあ、実際そうなるけどな」

紳はそう言って笑った。

「私は・・・私はね、友達だと思ってた人に、素直な自分を出してたつもりなの。でも、彼女はそんな私とは、友達になれないみたいみんなそうなの」

私は、いつのまにか紳にこう言っていた。

紳は、何も言わずに突然の私の話に、耳を傾けてくれた。

しばらくして、紳が口を開いた。

「ボク、昔喋り方がおかしい、女の子なのに僕って言うのは変だつて苛められてたんだ」

紳がクツキーを齧った。さくさくと、美味しい音がする。

「でも、中学生になって、そんなボクを受け入れてくれた奴がいたんだ。小学校は違ったんだけど、小さい時遊んだことがあった子だったんだ。いつも、ボクを笑う子がいたらその子達のところに行つて、どうして自分らしさを出すのがいけないんだって言ってた。ボクにも、ちゃんと付き合いもしないで離れていくような人は、本当の友達じゃないよって言ってくれた。その子のおかげで、ボクは本当の友達がたくさんできたし、楽しい思い出もたくさんできた。今でも、彼とは親友だよ」

紳は少し照れた様にへへつと笑った。私には、紳が輝いている様に見える。

「それでね、亜志貴はその子にそっくりなんだ」

紳の声は、とても落ち着く。私は、そういう人をもう一人知っている。

「ボクたち、良い友達になれそうだね」

どこかで聞いたような台詞を言つて、彼女はとても可愛らしい微笑みを浮かべた。

「うん」

私に、大切な友達ができた瞬間だった。

私の、本当の友達。



## 第十話 街にて

僕は、今日は少し遠出をしている。

と言っても、いつも降りる駅より二つ向こうの駅で降りたというだけだ。

今日は、この駅の近くにある服屋に用事がある。一番の理由は、そこで働き始めたという友達に会いに来たのだ。服はついだ。

「いらっしやい」

その友達は、小学生の頃からの大親友だ。とても明るくて、良い奴だ。良い奴という言葉で片付けてしまうのは、惜しいかもしれない。

「おう、穩風！久しぶりだな」

彼、瑛悟<sup>えいご</sup>が、僕だと分かると近づいてきた。

「へえ、おしゃれな店だね」

僕が感想を述べると、彼は嬉しそうに笑った。ごちゃごちゃしてなくて、本当にいい店だ。

「だろ？俺、ついこの間から働き始めたんだ。良い感じだから、好きなんだ。お前が気に入ってくれて、嬉しいよ」

彼と少し話をしてから、僕は服を選んで、買った。そして、彼と別れた。

外に出て、しばらく歩くとコンビニがあったので、僕はそこでレモンティーを買った。

またしばらく歩くと、きれいな公園があった。そのベンチに座って、一休みした。小さな子供たちが何人か仲良く遊んでいて、その側で若いお母さん達がおしゃべりをしている。平和だった。

今日はもう大晦日。

早く帰って、またいろいろと準備を手伝わなければ。

お正月には、幸時家にたくさんお客様が来るらしい。幸時賢貴さんの仕事関係の人々だと、亜志貴さんは言っていた。

しばらく穏やかな陽射しの中ぼんやりしていると、突然横から声をかけられた。

「おう、こんなとこで何してんだ？」

僕は顔を上げた。そこには、知らない男の人がいた。彼の後ろから西日が当たっていて、顔が見えない。

僕はキョロキョロと辺りを見回したが、誰もいなかった。確かに僕に話し掛けているようだ。

その人は、僕の横に座った。影がなくなり、彼の顔が見えた。

その顔を見たとき、僕は自分の目をかなり疑った。

その人は、亜志貴さんにそっくりだった。

顔だけじゃない。声も、感じも、何もかも。テレビに出てくる、きやーきやーと騒がれるようなカツコイ顔だ。赤くてサラサラしている髪は少し長いが、全然変ではない。瞳の色は、藍色だ。

「どうした。大丈夫か？」

その人は二カつと笑った。僕はもう訳が分からなくなった。

「あの、どこかでお会いしましたか？」

言い終わったとたん、彼の顔は喜びに満ちた表情になった。それから一つ咳払いをした。

「はい。いつもお会いしていますよ、堂月さん」

その人が声を変えて、妖しげに笑いながらそう言った。

「まさか・・・」

「お分かりですね」

彼は微笑んだ。

嘘だー！

僕は心の中で叫んだ。だって・・・だって・・・

「ぼ、僕をからかってるんですか？あなたは男じゃないですか！それに、どうして彼女のことを・・・？！」

僕の反応を、彼は紳のように面白がった。

「俺が彼女だからだよ。加東白。幸時家では亜志貴様のお世話係。どうだ？これで信じるか？」

加東白を名乗る男は、悪戯っぽく言った。もう、否定できない。

僕は彼を見た。よく見ると、幸時賢貴さんと凜さんにも似ている。

「どうして、彼女に？」

僕は訊いた。

「自分の力を試してみたかったからさ。子供の頃から興味があつて、今は専門学校と大学に行つてる」

「じよ、女装の専門学校つて有るんですか？」

「違う！メイクだよ、メ・イ・ク！まあ、幸時家のパーティーとかにあんまり興味が無いつてのもあるけどな。でも、こうして実体を見ても気がつかないつてことは、俺の腕が確実に上がったつて事だよな」

（そうなのか？）

僕はまだ半信半疑だけれど、一応納得した。

（化粧つて、こんなにも人を変えるものなんだな・・・）

しかし、いざ冷静になると、彼の言葉にひっかかりを感じた。

「なんか、まるで幸時家の人みたいな言い方ですね」

僕はもうその時すでに、彼の返事を心の中で聞いたような気がした。

「俺、幸時家の人間だぜ。本名、幸時由乃<sup>（こころよしの）</sup>。加東白は偽名だよ」

僕はもう頭がごちゃごちゃになった。

「つてことは、あなたは亜志貴さんのお兄さん？」

「イエス！」

彼はVサインをした。何だか、夢みたいだ。僕は起きながら夢を見ているのか？

「由乃さんが加東さんだった。由乃さんは男性・・・。はっ、由乃さん、そんなシュミ・・・」

「だから違うつて！自分の実力を試してるんだつてばっ！」

彼は顔を真っ赤にして、僕の意見を否定した。僕は思わず笑つてしまった。

「で、穩風は何を考えてたんだ？もしかして亜志貴の事か？」

彼はそう言つてニヤッと笑った。今度は、僕の顔が真っ赤になった。

「ちょっと、勝手に人の名前呼び捨てしないでください！それに、僕はそんな・・・！」

「まあまあ、俺のことも由乃でいいからさ」

彼は僕にドードーと言って肩を軽く叩いた。

「それに、凶星だろ？」

僕は、彼の言葉にうつ・・・となった。

そう、凶星だ。

僕は、最近よく彼女のことを考えてしまう。どうしてかと最初は頭を悩ませていた。

俺の働いてる店に来いよと電話をしてきた瑛悟に相談すると、それは恋の病だべ、と彼は電話口で笑った。昨日のことだ。

おうおう、突然何かと思えば。いっちょまえにそんな贅沢な悩み持ちやがって

「だってさ、こんなこと相談できるの瑛悟ぐらいなんだ。僕、いくら考えても分かんないし・・・」

まあお前はそういう奴だわ、昔から。よし、特別教えてやる。ズバリ、お前は亜志貴さんが好きなんだ！

「え？！これが好きってことなの？！」

・・・つとに、何にも知らないんだな。そうだよ。で、好きになるとその人のことばかり考えてしまう。側にいるとドキドキするんだ。おまえ、現在進行形でそうなんだろ？

「う・・・うん」

じゃあそうなんだよ

「ん・・・そっか。分かった。ありがとう、瑛悟」

おう！好きになった奴は大切にしろよ

そうだ、僕は亜志貴さんのことを好きになってしまったのだ。

亜志貴さんは、どう想っているんだろう？

「俺は応援するぜ。愛する妹だからな、そこらの奴じゃ駄目だと思つてたけど、穏風なら大丈夫だ」

彼はハッハッハッと大声で笑った。砂場の子供たちが、こちら

をじつと見ていた。

僕はますます赤くなってしまった。

## 第十一話 天使の羽

「ねえ亜志貴、ホントにボクも出席して良いの？」

紳が不安そうに私に囁いた。

「お母さんは良いって言ってたわ。それに、会社の人たちは、みんな優しく良い人たちよ。ちゃんと正装もしているし、心配しなくても大丈夫」

私の言葉で、紳は安心したようだ。いつもの紳らしくなくて、可愛かった。

私達が食堂に行くと、染谷さんや榛田さんたちが、食事の用意などをしていた。

「あれ、あそこにいるの穩風じゃないか？」

紳が部屋の奥の方を指指した。そこには、加東さんと何か話をしている彼の姿があった。彼は、お父さんに借りたらしいスーツを着ていた。

私は、顔が火照るのを感じた。心臓が、苦しい程ドキドキしてしまふ。

「穩風！」

紳が呼ぶと、彼らはこちらを向いた。加東さんが、私をちらっと見てから、また彼を見た。

「では、私はこれで」

彼女はそう言つて、準備をしている人たちのところに歩いていった。「何の話をしていたのだ？」

紳が、堂月さんの腕をぎゅっと握った。

それを見た瞬間、胸が締め付けられた。

嫉妬。

あの時感じたのも、そして今のこの感情も、きっとこの嫉妬。

「何でもないよ」

彼はそう言ってから私の方を見た。私はそっと一回、腕を擦った。

「穏風、亜志貴とっても可愛いだろ？」

紳がニコつと笑って彼にそう言った。

「うん。でも、はじめはいつもと全然違ったから、分からなかったよ」

そう、私はいつもと違う。今日は淡い黄色のワンピースを着ている。髪も、いつもはきつちりとおだんごにしているけれど、加東さんがちょっとだけアレンジしてくれた。

「すごく素敵だよ、亜志貴さん」

彼はそう言っで微笑んだ。

私は、茹だっでしまっかと思っくらいに、頬が熱くなっだ。

今日は、食事というよりも宴会のようだ。みんなで楽しく過ごすことを大切にする。

「やあ、楽しんでるかね」

お父さんが、私と紳、堂月さんが座っでいるところに来た。

「はい」

堂月さんが微笑んで言っだ。

「そうか、それは良かった。たくさん食べてくれ。途中で抜けても構わないからね」

お父さんはそれだけ言っで、別の席に行っだ。

私達はしばらくして途中で抜け、リビングでトランプをした。堂月さんと紳に教わりながら、他にもたくさんゲームをした。

「なんだか喉が渴いてきたのだ」

紳がそう言っだので、私は立ち上がっで、飲み物を取っでくると言っだ。彼らは一緒に行くよと言っだけれど、私は一人で行くと言っで、部屋を出た。

月の光が中庭を照らす縁側の渡り廊下を少し早足で歩いてると、角から突然人が出てきたので、私はその人にぶつかっでしまった。「大丈夫？」

その人は、倒れそうになっだ私を支えてくれた。

「す、すいません」

顔を上げてその人を見た時、私は心臓が止りそうになった。  
堂月さんにそっくりだ。

「こちらこそすまなかった。いや、前にお邪魔させていただいた時、この縁側の景色が素晴らしかったのですね、ちよつと来てみたのだよ」  
彼の優しく暖かい表情も、ますます堂月さんに似ている。

私が戸惑っていると、彼は突然思い出したように言った。

「ああ、君は賢貴の娘さんだね。いやあ、大きくなったね。私が初めて会った時は、まだ小さかったのに」

私は彼を思い出せなかった。私は失礼しますと言って、台所に向かった。

（彼は、誰だったのだろう・・・）

紅茶を入れたトレーを慎重に持つて、やっとリビングの前に帰ってきた。

「なあ穏風、正直に言った方が良いぞ。ほらほら」

紳の声が聞こえた。私は引き戸を開けようとした手を止めた。どうして止めたのか分からない。そのまま入れば良かったのに・・・  
堂月さんの声が、続いて聞こえた。

「・・・分かった。好きだよ。大好きだよ」

ああ・・・もう嫌だ。

私の足はガクガクと震えた。

信じたからだ。他人を信じたからだ！

私は、また自分を傷つけた。

「おつ、亜志貴！悪かったな、一人で行かせて。時間がかかったみたいだけど、大丈夫か？」

紳がパタパタと駆け寄って、入ってきた私からトレーを受け取った。彼も「ありがとう」と微笑んだ。

「ん？どうした、亜志貴。そんなところに突っ立ってないで、こつちおいでよ」

紳がトレーを置いてから、細く長い足でクルッと私の方を向いた。



黒色の、膝より少し短いスカートが揺れた。

「わ、私、気分が悪くなつたから部屋に戻つてゐる」

私は、震える声を必死に抑えながら、何とかこれだけ言つた。

「え、大丈夫か？」

「部屋まで送ろうか」

彼らは心配そうに声をかけてくれたが、私はできるだけそれを丁寧に断り、部屋を出た。

また、縁側の廊下に差し掛かった。

（さっきここを通つた時の浮かれてた私が、バカみたい・・・）

私は歩みを止め、外を見た。雪が降っている。

ガラス戸を開け、スリッパのまま外に出た。空気が冷たい。

どこからか、除夜の鐘の音が聞こえた。私は静かにガラス戸を閉めた。こうすると、中に私の声は聞こえない。

『天使の羽が一枚一枚舞い降りてきて、幸せを分けてくれているんじゃないかと思うと、言葉では言い表せないような気持ちになるんだ』

彼の言葉が、すぐそこで聞こえたような気がした。

涙が零れた。

私は、しゃがみ込み、声を上げて泣いた。こんなに泣いたのは、あの時以来だ。いや、あの時よりも今はもっと悲しかった。止めようがない。

天使の羽たちが、私を撫でては、ひらひらと落ちて行つた。

## 第十二話 推理

亜志貴さんの元気が無い。

年が明けてもうすでに三日経ったが、ほとんど口を利かなくなってしまった。

しばらく、家庭教師は休みだ。

「なあ穩風、今日見舞いに行こっか」

紳が、四日目になる朝、僕の部屋に来てそう言った。

「んゝゝゝ 良いのかなあ、部屋に行っても」

僕が言うと、彼女はオツケーサインを出した。

「賢貴さんに、さっき偶然そこで会ったんだ。彼は、良いよって言うてた。ほら、行こう！」

僕は彼女に腕を引っ張られた。

何だか僕が行ってはいけない気がしたが、様子も見なかったので、行くことにした。

「亜志貴、紳だぞ。入っても良いか？」

紳がドアの向こうに呼びかけると、どうぞと、少し掠れた声がした。

亜志貴さんは、机に向かっていた。勉強をしているようだ。

紳がもう一度声をかけた。彼女がゆっくり振り返った。

その時、僕と彼女の目が合った。彼女の表情が凍りついた。

亜志貴さんの、あの硝子細工のような藍色の目が曇っているように見えた。

「亜志貴、穩風と一緒に来たぞ。穩風、おまえのことすごく心配してたぞ」

彼女が僕を見た。彼女が、こちらに体を向けた。

「ご心配をおかけして、すみません」

僕は、彼女の冷たい声にぞくつとした。

（どうしたんだろう。僕が、何か・・・）

彼女があまりにも疲れているようなので、紳を残して、僕は速やかに部屋を立ち去った。

と、廊下で加東さん・・・由乃と出会った。通り過ぎようとした僕を、彼は呼び止めた。

「おい、穩風。亜志貴と何かあったのか？」

それが分からないから困っているのだ。

「とりあえず、俺の部屋に來い」

彼は小声でそう言うてから、僕を従えて歩いた。その時の彼の真剣な顔は、あの時、僕に頭を下げた賢貴さんに似ていた。家族を想う、温かいけれど、どこかそわそわしたような感じ。

彼の部屋は、とてもきれいに片づけられていた。僕は、椅子を勧められた。

「正月の時から、亜志貴の様子がおかしい。穩風、おまえと紳と亜志貴、たしか途中で宴会を抜けたよな。あの時、何があったんだ」  
由乃は、責める風でもなく、穩やかにそう言った。しかし、表情は堅かった。

「俺達、リビングで遊んでたんだ。それで、紳が喉が渴いたって言ったら、亜志貴さんが飲み物を取ってくるって言うてくれたんだ。そこまでは、特に変わった様子は無かったんだけど・・・」

僕は注意深く、見逃すところが無い様に記憶を辿った。

「それで、戻ってきた時、気分が悪いから部屋に戻るって言うてリビングを出ていった」

彼はしばらく僕の話の話を頭の中で整理し、分析していたようだが、不意に意外な質問をした。

「なあ、穩風と紳、待ってる間どんな会話してた？」

彼はもしかしたら・・・と呟いた。僕は、紳との会話を思い出そうとした。

『なあ穩風、好きな人いるか？』

トランプをきりながら、紳が言った。僕はぎよっとしたが、とりあ

えず『まあね』と言った。紳になら、ここまでくらい教えても大丈夫だろう。

しかし、『それ、亜志貴か?』といきなり核心を突かれ、僕は『あ・・』と言ってしまった。その僕の微妙な表情の変化を、紳は見逃さなかった。

『おおっ、ビンゴ! そうなんだな?! そうだと思ったんだよ。穩風、亜志貴が好きなんだな?』

紳が、まるで欲しかった物を買いはってもらった子供のように目を輝かせ、幸せそうにニコニコと笑った。僕は自分を呪った。

『なあ穩風、正直に言った方が良いぞ。ほらほら』

紳に迫られ、僕はもう白状するしかないと思った。いくら昔からお互いの秘密を打ち明けあってきたと言っても、この時だけは、勇気が要った。

『分かった。好きだよ。大好きだよ』

『それだ!』

突然由乃が大声を出したので、僕は思わず「わっ!」と声を上げてしまった。

「亜志貴は、きっとその会話の後半部分だけを、部屋の外で立ち聞きしてしまったんだ。それで、勘違いしたんだ。総合的に考えて、問題はそこしかない。」

僕は、彼の探偵の様な発言の意味が分からなかった。

(勘違いって、亜志貴さんは・・・)

「でも、僕と紳は兄妹だよ?」

「紳は自己紹介の時そういう風に言わなかったし、下の名前しか言わなかった。俺、食堂の外で聞いてたんだ」

僕はその時のことを思い出してみた。

『こんばんは。今日から居候することになりました、紳です。よろしく願います』

「あ、ほんとだ・・・」

「それに、失礼なことを言うが、穂風と紳はあまり顔が似ていない」  
僕はナルホド！と、一時納得したが・・・。

「え、じゃあそれで亜志貴さんは・・・？」

由乃は頷いた。

彼の推理は、彼が僕の妹の名前を呼び捨てにしていることにも気がつかないくらい僕に衝撃を与えた。

### 第十三話 思わぬところに青い鳥

私は、縁側に座っていた。

今日は堂月さんも紳もいない。

堂月さんは朝から大学に、紳は、例のケーキ屋さんにまたクッキーを買いに行ったのだ。

また、失くしてしまった。

私は彼のことを忘れようと勉強しまくったが、それももう限界のようだ。

もうすぐ冬休みも終わる。冬休みが終われば、また私は学校に行かなければならない。

でも、大丈夫。紳がいるもの。

紳が、実は私より二つ年上で、大学一年生だと聞いたのは、三日ほど前だ。

堂月さんがあの日部屋を出てから、私と紳はたくさん話をした。将来の夢や、好きな本、彼女のおすすめの映画や、その内容についてなど、紳の話題は尽きない。

『ボクはね、外国が大好き。父さんと母さんが、ずっとそういう仕事をしていたからかな。その中でも特にフランスが好きで、大学も、外国のことが勉強できるところに行ってるんだ。それで、大学生になって何ヶ月かしてから留学に行ったの。とつても勉強になったぞ』

彼女の顔が、また輝いていた。

私は、目標をもっている紳が、手の届かない存在に思えた。

『好きな人ができるとね、』

彼女は私の顔を見て言った。

胸がズキッと痛んだ。彼女は、私の気持ちを知らない。でも、深く追求しない。・・・彼と同じだった。

『けっこう何でも頑張れるよ』

紳の笑みは、純粹に綺麗だった。私は、少し考えてから、こう言った。

『ねえ、紳』

紳が、ん？と私の顔を覗き込んだ。私はまた少し考えた。彼女はじつと、待ってくれた。

『紳は、堂月さんのこと・・・好き？』

私が彼女を見ると、彼女は何の躊躇いもなく頷いた。

『うんッ、大好きだよ！』

私は、彼女には敵わないのかもしれない。

私は、雲一つない空を仰いだ。どこまでも続くその空に、体が染まっ  
ていきそうな気がした。冷たい風が吹いて、雪を纏った紅葉の木  
が、寒そうに揺れた。

と、東棟からこちらに、誰かが歩いてきた。笑い声が聞こえる。二  
つとも、聞いたことのある声だ。

私は、聴覚だけを現実に残し、他の感覚を全て美しいこの景色に溶  
かした。

「亜志貴、こんなところで何をしているんだい？」

聴覚が、その呼びかけに応じて私を現実に呼び戻してくれた。振り  
返ると、そこにはスーツを着たお父さんと、もう一人、あの人がい  
た。

私は慌てて立ち上がってスリッパを履いた。

「こ、こんにちは。先日は失礼致しました」

私が挨拶をすると、彼はあの人と同じように、柔らかい目をした。  
魅力的なあの目は、相変わらずとても澄んでいた。

「いやいや、こちらこそ」

彼の微笑みはあの人そのもの、と言って良かった。

お父さんが彼に、何のことかと訊ねた。

「いや、正月の日に私が彼女にぶつかってしまったのだよ。でも、  
あの時は驚いたな。君の娘さんが、もうこんなに美しい、礼儀正し

い女性になっっているなんて。私が穩風と紳を初めて連れてきた時は、まだ三・四歳じゃなかったか？」

私を見ながら、彼は言った。

（今なんて・・・）

「そうだなあ、もう十三年ほど経つか。早いもんだな」

お父さんも、私の顔を見て言った。

「亜志貴、覚えてないか？堂月さんだよ。私の親友の、堂月おじさんだ。お前も昔はよく、穩風君や紳ちゃんや由乃と遊んだもんだぞ」お父さんが懐かしそうに遠くを見た。

私は驚き過ぎて、言葉が出なかった。堂月さんが笑った。

「覚えておらんだろ。何しろ由乃君と穩風が、まだ幼稚園生になったばかりだったんだから。私も穩風に幸時家のことを言ったが、何も思い出さんかった。面白いから、時子ときことグルになって、このことは黙っておいたんだ」

「恵二けいじと時子さんは、相変わらずそういう事が好きだな」

二人は一緒に笑った。

（そうだったのか。紳と堂月さんは、兄妹だったんだ！）

全てが変わった。世界が、とても美しく煌いて見えた。何もかもが、素晴らしく思えた。自然と笑みがこぼれた。

「あれ？！父さん！」

突然、西棟の側から声がした。見ると、そこには堂月さんと紳がいた。

堂月さんは歩いてこちらにやって来たが、紳は走って、堂月さん・

・堂月おじさんに抱きついた。

がっしりした体つきの堂月おじさんに抱えられた紳は、まるで小さな子供の様だった。

「父さん、来てたんだね！ヒドイじゃないかつ、ボクを放って母さんと旅行に行っちゃって」

紳が頬を膨らませると、おじさんは、彼女の頭を優しく撫でた。

「お土産を買ってきたから、許しておくれ。それに、久しぶりに由



乃君や亜志貴ちゃんに会えて良かっただろ？」

彼女はしょうがないな、許してやると言って笑った。

「なんだ。紳、知ってたの」

私と堂月さんがほぼ同時に言った。私達はお互いを見て、そして笑った。紳も笑いながら言った。

「当たり前だ。ボクの記憶力を嘗めるなよ。父さんと母さんと、それから由乃と凜さんと賢貴さんとグルになって、黙っていたのだ」  
彼らは、とても愉快そうに笑った。

私は、堂月さんを見た。彼も私を見て、ちょっと仕方なさそうに、でも幸せそうに微笑んだ。

人を『好きになる』ことを、私は少し理解できたのかもしれない。  
人を信じてみたいと思った。

めちゃくちゃだったけれど、堂月さんが私のことをどう思ってくれているのか分からないけれど、私は堂月穩風さんが好き。

どこかで、鳥がさええった。

## エピソード

最近、だいぶ春らしくなってきた。

外は晴れていて、そんなに寒くも無いので、窓を開けて風を受けながらリビングのソファに座っていた。

すると、開けたままにしておいた扉から亜志貴が入ってきた。髪をポニーテールにして、着物の袖を紐でたくし上げている。

「ちょっとお兄ちゃん。一人だけそんなところでのんびりしてないで！みんな一生懸命働いてるのに」

俺はたくましくなった妹を見ることが出来て嬉しかったが、こう五月蠅くてはかなわない。

「久しぶりに実家に帰ってきた兄に向かって、それは無いだろ。それより旦那は？」

俺は仕方なくよっこいしょと立ち上がった。

「旦那って言わないで、ちゃんと名前で呼んであげてよ」

彼女は、こういう言い方はしているが、怒ってはいない様だ。顔が笑っている。

俺は、亜志貴と一緒に外に出た。

「はいはい。で、穏風は？まさか俺一人で手伝うわけじゃないよな？」

「さつき帰って来て、みんなと一緒にいるわ。だからお兄ちゃんも早く」

彼女の走り去る後ろ姿を目で追いながら、俺はこの四年間を思い返した。

穏風と亜志貴は、あれから付き合うことになった。紳も外国の文化について勉強しているし、亜志貴は紳のアドバイスのおかげで、たくさん友達ができたと言っていた。

紳は、俺が中学生の時に紳に言ったことを亜志貴に言ったと言って

いたが、俺は全然覚えていなかった。  
ま、とりあえずめでたしめでたしだ。

『でも、衝撃の事実は・・・』

『お兄ちゃんの女装だよね』

紳と亜志貴は、俺の変装を一昨年くらいに見破ってしまった。前から何となく分かっていたと、亜志貴は言った。  
がっかりだ。

俺は、思わず穩風のあの時の反応を疑ってしまったが、あいつは本当に分からなかったようだ。

亜志貴と穩風が付き合い始めたその三年後・・・

『はあ?! 結婚する?!』

俺が叫ぶと、穩風がビクつとして『うん』と返事をした。亜志貴の顔は、真っ赤だった。

『マジかよ。恵二さん、時子さん! 父さんも母さんも、許して良いのか?』

俺が彼らを振り返ると、彼ら四人は顔を見合わせ、ニヤリと笑った。  
『もちろんさ。もともとこうならなくても、彼らはお見合いする予定だったんだから』

父さんが、何でもないように爽やかに微笑んだ。

『は?!』

俺達三人の驚いた顔を見て、母さんは無邪気に微笑んだ。

『私たちの計画が、こんなに上手くいくとは思わなかったわ。家庭教師っていうのが、効果絶大だったわね』

それから母さんと時子さんは手を取り合って、若い女の子のようにキアキアと喜んだ。

『・・・たく、しゃーねーな。愛する妹よ、困ったことがあったらいつでも俺に言っただぜ』

俺がそう言つと、亜志貴はくすくすと笑った。

『女装するようなお兄ちゃんに、安易に相談なんかできないわ。お

兄ちゃんこそ、紳と何かあったら、私たちに相談してよね」

みんなが笑った。俺も仕方なく認め、笑った。

亜志貴がいつも笑ってくれていたら、俺はそれで良い。

「由乃、何ボーツとしてるの？早くしないと入れてやらないぞ」

紺色のドレスを身に纏った紳が、そう言っただけ俺を手招いた。

結婚記念パーティーの準備をし終えてから、みんなで集合写真を撮った。真ん中に幸時家と堂月家の両夫婦。その右側に穂風と亜志貴、反対側に俺と紳が並んだ。

「さて、みなさん宜しいですか？」

みんながテーブルについたのを見計らい、父さんが片手に、ワインの入ったグラスを持った。みんなも、それぞれの飲み物を片手に取る。

「それでは、穂風君と亜志貴の結婚、由乃と紳さんの結婚一周年を祝って・・・」

続いて恵二おじさんが言った。

「私達の末永い幸せを願って！」

みんなが一斉にグラスを掲げた。

「かんぱーい！」

## エピソード（後書き）

恋を知る人たちを書きたくて、創りました。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2236d/>

---

晴れた日に

2010年12月24日14時12分発行